

『英語音声学・音韻論—理論と実践—』 大阪教育図書 (2022)

長瀬慶來教授古希記念出版刊行委員会 編
(A5 判 / 361 pp. ISBN: 978-4-271-21078-8)

扨田 清
和洋女子大学

はじめに

本書『英語音声学・音韻論—理論と実践—』は、山梨大学名誉教授・関西国際大学教授であられる長瀬慶來(ながせ よしき)先生の古希を慶賀するために編まれたものである。本書の「はしがき」と「あとがき」でも言及されているが、通例、この種の記念出版は論集の形をとる。しかし、本書は論集ではなく、学生や英語教員に向けた英語学や英語音声学のためのテキストとして編まれているのである。「はしがき」を担当されている伊達民和氏が「これは英語音声研究の楽しさを知ってもらい、後進を育てたいという長瀬教授のお人柄を反映してのもの」と説明し、また、「あとがき」で上野舞斗氏が「記念出版としては異例」とするのにも頷けるし、その編集意図は大いに成功していると言えるだろう。

拙稿では以下、本書の構成を紹介した後、本書が対象としている英語教員のひとりとしての評者が「よくぞここまで説明してくれた、授業で使える!」と感じ入った本書の特徴のいくつかに言及してみたい。もちろん、評者の力量で本書をどこまで正しく理解し正当に評価できるのか甚だ心許なく、また、かえって本書の価値を貶めることがないようにと願うものである。

1. 本書の構成

本書の概要については、少々長くはなるが、編集代表でもある前出の伊達氏による「まえがき」の記述に頼ることとしたい。

本書の特徴は、何より英語音声に関する広範な領域を扱った網羅性にあります。従来、「英語音声」を冠した書籍は音声学・音韻論を別々に扱うことも多かったのですが、英語音声研究において音声学・音韻論はいわば車の両輪のようなもので、英語音声をどのように観察し記述するかという点のみならず、どのように説明するかという点も考慮せねばなりません。そのため、本書では、発声のメカニズム、英語の音韻体系など、調音音声学にもとづく一般的な英語音声学の書籍で扱われる項目だけでなく、音声を物理的に捉えようとする音響音声学、音声現象から一定の法則性を抽出しようとする音韻論も扱っています。また、歴史的な視点から英語音韻の変遷、Englishes の観点から英語の変種の広がりも扱っています。さらには、教育現場にも活かされるように外国語音声教育についてもページを割いています。(下線は本稿評者による)

本書は 5 部構成で全 13 章から構成されている。第 I 部「音声学」、第 II 部「音韻論」、第 III 部「音響音声学」、第 IV 部「音声学・音韻論と外国語教育」、そして第 V 部には Neil V. Smith, John C. Wells, Allan Cruttenden, Jane Setter など超一流の言語学者に加えて、本学会の海外顧問でもある Geoff Lindsey と Paul Carley の各氏が祝辞を寄せている。

次に、第 I 部から第 IV 部までの章立てを概観しておきたい。紙幅の都合で節以下の見出しを紹介できないのは残念であるが、「英語音声に関する広範な領域を扱った網羅性」の片鱗は伝

わるであろう。

第Ⅰ部 音声学

- 第1章 言語研究と音声研究 —音声学・音韻論概観—
- 第2章 国際音声記号と基本母音・基本子音
- 第3章 英語の分節音Ⅰ —母音—
- 第4章 英語の分節音Ⅱ —子音—
- 第5章 音節, 音連鎖, 連続音声
- 第6章 英語の強勢, アクセント, リズム
- 第7章 英語のイントネーション
- 第8章 世界の英語

第Ⅱ部 音韻論

- 第9章 英語音韻論 —構造主義音韻論から生成文法の音韻論へ—
- 第10章 英語音韻史

第Ⅲ部 音響音声学

- 第11章 音響音声学と音声分析ソフト

第Ⅳ部 音声学・音韻論と外国語教育

- 第12章 初等英語教育と音声教育 —音声指導の重要性と段階に応じた指導の留意点—
- 第13章 中等英語教育と音声教育 —音声教育における「主体的・対話的で深い学び」—

2. 本書の特徴

本書は時にその分野の門外漢には馴染みのない内容も含まれるが、「英語学や英語音声学を学ぶ学生や教壇に立って英語を教えておられる方々のためテキストとして編まれてい」と「はしがき」(p. i)においても言及されているように、各章に「ふりかえり」の項がおかれ、当該の章で学習したことが簡潔にまとめられている。これにより、ぱっと視界が開けるような救いがある。たとえば、第9章の「ふりかえり」では、構造主義音韻論と生成音韻論について、次のような簡にして要を得たまとめをしてくれている。

構造主義は、ヨーロッパの構造主義とアメリカの構造主義に大別されるが、いずれの言語理論ないし音韻論も、(今では当然のことだが)言語に構造が存するという発見をし、さらにその記述を行ったのだといえる。一方、生成文法の音韻論は、言語に構造が存することを前提とし、それに対する種々の説明をこころみただといえる。(p. 197)

また、各章の末尾に付けられた「さらに深めたい人への文献案内」も配慮が行き届いている。厳選した文献紹介の中に、最新のものばかりでなく、古典と言えるような文献にも言及している。本書の意図する「教える」スタンスはこういった細部にも見て取れる。

ここからはいくつかの章について、特筆すべきと評者が判断した点を挙げてみたい。

まず、「第I部 音声学」の第2章「国際音声記号と基本母音・基本子音」である。ここでは、国際音声学会および国際音声記号について歴史的な変遷を丁寧に記述しているが、各種の強勢符号に関する説明は非常にわかりやすい。「IPA式」、「ウェブスター式」、そして「母音直上式」の強勢符号それぞれの特徴を概観した後、p. 37の表2.4「3方式の強勢符号のつけ方の比較」では、communication という語を例に「IPA式」、「ウェブスター式」、そして「母音直上式」の強勢符号の付け方を整理している。これは学部生でも理解しやすい説明となっている。

また、第3章「英語の分節音 I —母音—」では、表3.2「母音一覧表」(pp. 42-43)で代表的な発音辞典、英和辞典および英語音声学書全17冊に記載されている母音の発音記号を一覧にまとめて比較しており、それぞれの異同が一目でわかるようになっている。さらに、記号の名称も Wells (1982) の「標準語彙セット」をコラム (p. 41) で紹介した上で、短母音については「記号の名称」という項目を立て別称も含めて紹介されている。たとえば、/æ/であれば「ash(アッシュ): 古英語の文字に由来、または lower-case A-E ligature(小文字 A と E の合字)」といった具合である。

第4章「英語の分節音 II —子音—」では、日本語の「ン」についての詳細な言及がある (pp. 69-70)。特に脚注の記述は興味深い。

また、日本語における軟口蓋鼻音 [ŋ] には、もうひとつ興味深い現象が観察されている。それはガ行鼻濁音と呼ばれる現象である。従来、語頭では有声軟口蓋閉鎖音 /g/ (たとえば、学校 [gakoo])、語中では [ŋ] (たとえば、小学校 [ɕooŋakko]) を用いるのが標準的であった。しかし、近年は特に若年層で [ŋ] の使用が減少し、/g/ が使用される傾向があるといわれている。(p. 70)

第5章「音節、音連鎖、連続音声」においては、5.1.1「音節区切りの表記法」(p. 86)の説明は非常にありがたい。特に図5.1「opossumの音節表記」では、opossum という単語を各社でどのように音節区切りをしているか、Longman Pronunciation Dictionary, 3rd edition と Cambridge English Pronouncing Dictionary, 18th edition, ジーニアス第5版とコアレックス第3版で比較してくれているのは、非常にわかりやすく、学部生にも紹介できて、ありがたい。

そして第7章「英語のイントネーション」は長瀬慶来先生ご自身が執筆を担当されている。これまでに『英語音声学の基礎』(研究社 1995)、『イギリス英語のイントネーション』(研究社 1994)、そして『英語のイントネーション』(研究社 2009)などを世に出されて来た長瀬先生の面目躍如たる章である。古希をお祝いされる側のはずが、まだまだ現役とばかりに健筆をふるわれている。これもある意味で「記念出版としては異例」であろうが、長瀬先生を良く知る方々にとっては「先生らしい」ということになるのだろうか。

第II部の最後を飾るのは第8章「世界の英語」である。英語音声学の教科書で世界の英語 (World Englishes) を取り扱うのは「本書が、英語音声学・音韻論の入門書では飽きたらない」(p. 329) 方々に向けられた書籍であることの証左ではないだろうか。また何より、世界の英語を扱おうという編著者たちの柔軟で行き届いた目配りは、まさに「開かれた言語観」の表れであろう。

「第III部 音響音声学」における第11章「音響音声学と音声分析ソフト」では、Praatを使用した母音と子音の音響分析を例示している。説明が懇切丁寧で、「コラム5: Praatの設定」とともに、さながら Praat のマニュアルのようでもある。さらに Praat を含む5つの音声分析ソフトの分析結果の違いについても一節が割かれている。音声分析の初心者にとって大変有益な手引きとなっている。

「第IV部 音声学・音韻論と外国語教育」では、本書の副題が示すように、理論と実践の接

続が具体的な形で示されている。第12章「初等英語教育と音声教育—音声指導の重要性と段階に応じた指導の留意点—」は中学年（小学校3年生と4年生）で始まる「外国語活動」と高学年（小学校5年生と6年生）での教科化された「外国語科」での音声指導について丁寧な解説がなされている。そして、続く第13章「中等英語教育と音声教育—音声教育における「主体的・対話的で深い学び」—」が中等教育、すなわち中学校と高等学校における英語音声教育について扱っている。初等教育と中等教育の連携や、学習指導要領との整合性も意識した音声指導の実践のためにも、英語科教員は必読であろう。

おわりに

拙稿では『英語音声学・音韻論—理論と実践—』について、浅学の身を顧みず書評を書かせて頂いた。「記念出版としては異例」とも評された本書であるが、こういった形式の記念出版が今後も増えることを切に願うほどに素晴らしい本になっている。評者以上に学識のある読者諸氏であれば、本書より汲み取れる叡智は評者のそれをはるかに上回るだろう。是非、本書を実際に手に取って、「英語のイントネーション、すなわち英語の発話におけるメロディーの意味と機能などの興味深い世界」(p. 123) に触れてみてほしい。